ことの出來ないリアリズムを持込まうとして常に無駄な努力をしてゐるのを見ると、實際痛ましい氣持にさへなる」といつてゐられるのは、勿論歌舞伎劇そのものを本質的に考へる時に、誠に妥當のことであることはいへるが、それで見ても歌舞劇の傳統そのものは、單なる傳統としてのみいつまでも不變のまゝに維持されることが、なかなか容易でないといふことがつくづくとうなづかれるやうに思ふのである。

それにつけても私が平生から最も殘念に思つてやまないのは、菊五郎なんていふ一種の國寶的俳優が、自分の藝術に對して餘りに無理解であることである。自分の藝術をあまりに尊重しなさ過ぎることである。もつといひかへれば自分の藝術を、もつと傳統的に保存し、いつまでも殘しておくことに不熱心な點を私は殘念に思はずにはゐられぬのである。

三

必ずしも彼菊五郎がやる凡ての藝術とはいはぬ、少くも「保名」であるとか「二人袴」であるとか、せめてあゝいつた舞踊中心の彼獨特の大藝術だけでもいゝ。彼は何故に之を出來る限りのさまざまの形式に於て保存しようとし、又之を一般大衆に翫賞せしめようとしないであらうか。手取早くいはゞ弟子に傳へることかいふことの一面に於て、何故に彼は之をフィルムにとろうとしないであらうか。世間はまた何故に之を要求し、フィルム會社は何故に之を企てようとしないであらうか。そして貴重なる國寶的傳統を永久に保存しようとしないのであらうか。金とか設備とか方法とかは問

題ではない。萬一の不幸が突發したらどうするのだ。私はむしろかういふ彼の藝術、殊に彼れ獨特の長所を有する歌舞伎的傳統の保存に世間も冷淡であり藝術家も冷淡であり、彼自らも亦一向に無關心であるがごときを不思議に思ひ、殘念に思つて止まないのである。

四

たしかトカタ・カルービと云ふ詩に於てだつたと思ふ、ブラウニングは音樂家が自分の天才的藝術を作曲に於てより外に永遠に傳へる方便なきことをなん〳〵と歎いてゐることを歌つてゐる。けれども蓄音機の發明は遂に音樂家をして長歎の無用を笑はしむるに至つた。俳優は今やフィルムの發明によりて、自分の藝術の一面の少くも殘され得ることを喜んでいゝ時勢になつた。而も團十郎の藝術の殆んど殘されてゐないことを歎く多くの劇關係者も、藝術家も爭ふて菊五郎の如き名優の藝をフィルムに殘すことに努力しようとはせずして、幸四郎とか勘彌などがほつ〳〵その欲望をもち始めたとはいひながら、猶ほその給料とか費用とかを問題にしてゐるといふに至つては沙汰の限りであると思ふ。俳優も努めて犧牲的の立場に立つてやるべく、興業者等は印稅を拂つても、かういふ國寶的の仕事には夢中になつてしかるべきだと思ふ。

私は六代目が市村座を脊負つて立つといふが如き現實的の問題よりも、もつと〳〵此種の方面に彼の如き生きた國寶が目覺めることの遲いのを惜みて止まないのである。

眞に生くるもの

大抵の人は飯を食つて息が通つてさへゐれば生きてゐると信じてゐる。だがそれは動物でもやつてゐることである。働くことは馬でも牛でもやつてゐる。家をつくることは蜂でも蟻でもやつてゐる。考へることなら犬でもやつてる。感ずることなら植物でもやつてるといはれる。私はこんなことで、人間が眞に生きてゐるといへるとは思はない。

本當に生きてゐるものには生命力の進展がなければならない。

生命力とは何であるか。それは外から内に入る力ではなくて、外から内に取り入れた物により、外からの物の刺戟によりて、内に萠え出で、内に湧き上つて、噴出せざれば已まない力である。たえ間なく内に萠え、内に湧き上つて、そのままではゐることの出來ざるものを、之に想像を加へ洗錬を施し、天賦の能力をもつて、外に向つて何者かの姿に現はし得る人こそは、眞に生きたる人である。そして之を自由自在になし得る人ほど最も幸福な人にして、また最も生き甲斐のある人である。外に求むることは犬も之を能くすることを得れども、内に萠ゆるものを外に表はすことは眞に生きる人にして始めて之を能くし得るをもつてゞある。

之に反して、常に外界に求むることにのみ汲々とし、四圍の狀況に縛られ、傳統因襲に捕へられ、常

に噴出せんとするものを吐出して外に現はすこと能はず、徒らに噴火口を塞いで、盲人の如く聾者の如く悶々としてゐるものは、眞に生くるにあらずして自殺するものである。彼が死すると共に、彼の存在してをつたことすらも直に塗抹されてしまふのである。けれども眞に生くるものの生命は彼の姿が見えなくなつても、いつまでも生きてゐるのである。

名利を求め、權勢を追ひ、物によりて樂を求め、自らの外に向つて幸福を得んとするものは、自らの内に萠ゆる靈妙なる力に氣付かず、却つて之を殺し、自らを殺すことによつて、寧ろ自ら外界に支配されるのである。「物の奴隷」となるのである。所謂物に物せられるのである。眞に生くるものは物に物せられず、事に支配されずして、外界の刺戟により乃至は外から取り入れたものを利用して、自らの内に湧き、自らの内に萠えて噴出せざれば已まざるものを外に向つて現はし、生命の力を自在に伸展せしめることによりて、眞の悦樂を感じ、そこに眞の幸福を見出すのである。

試に基督の愛を見よ。佛陀の大慈悲を見よ。孔子の仁を見よ。或は又詩人の活動を見よ。美術家の勞作を見よ。發明家の惱みを見よ。哲學者の努力を見よ。皆之れ限りもなき物を外に求むることではなくして、内に湧き上つて止まざるものを外に向つて表はすものである。

目覺めたる自我は、外より迫り來る一切を自らの坩堝に入れて、熔融し、洗錬し、鍛ひあげて、自らのものとして再び全人格をもつて自在に之を外に現はすのである。これ自らを生かし、眞に自ら生くるものである。文學は此處に生れ、藝術はここに生れる。宗教はこゝに生れる。

外に求めて止まざる生活は人類文化の歴史の材料にはなつても、文化の中心生命ではない。内より外に表はすことによつて、眞に生くるものの生活は、文化の中心生命である。自ら生きると同時に、人類の生命である。

眞の藝術は、人類の爲の藝術であり、人生の爲の藝術であらねはならぬ。

そこには個人の生命が流れてゐると同時に、人類の生命、全社會の生命、全宇宙の生命が流れてをらねはならぬ。

共榮共存と進化とは人類の生命である。自らの内に萠ゆるものを、洗錬によつて外に現はすことは、即ち創造することである。藝術は即ち此創造中の最も純粹なるものである。人類の生命の進みに向つて此純粹なる創造をすることは即ち眞に生くることの一つであらねはならぬ。

眞に生くる喜

一

人間の世に何一つ絶對のものがあるか。科學だとて哲學だとて、割合に信ずるに足るといふ以上に絶對の力あるものではない。ツェツペリンが空の威力として絶對のものであらうか、大體に安全を誇り得るといふに過ぎないものである。

強きを誇りとする體が、弱いとされたものよりも長生し得るときまつてゐるだらうか。

富と云ひ地位といひ、現實に於てこそ暴威を揮ふことがあつても、時の力の下に、それに對して何程の絶對價を認めることが出來よう。堅牢にして石よりも硬さうな鐵筋混凝土建にしても、二百五十年の保證しかついてゐないといふではないか。

親子の愛にだつて、絶對の力がどこにあるか、これはと驚くことが餘りに多いに呆れさせられる。成程親こそは本能の力に引ずられて子の後を追かけうが、　處が時とすると、子供はさつさと巣から出てゆく。

人間が物足らなさを感じ淋しさを思ふて、至强至善至高全能の力を求め、之を理想化し人格化して、神と云ひ佛と呼んで、之に依頼せんとするのは自然の勢である。

地上の力が餘りに無力であり、人間界の一切は餘りに頼むに足らぬからである。現實の人生が餘りにはかないものであり、あまりに無茶苦茶が幅をきかすからである。不公平が限りないからである。

眞面目に考へれば考へるほど、現實の人生は甚だ頼み少いものである。現實位不公平不正不義の充滿してゐるものはないからである。

詩人ジョージ・メレヂスは卽ち强者の哲學を說いた。一切は强いといふことによつて解決すべきである、弱いといふことは抑も罪惡であると。

けれども强いといふことの半面には弱いといふことが隱されてゐる。弱いといふことがあるからこそ强いといふことがいへるのである。而も其强いといふこと、有ゆる力といふものすらが、地上に於ては何の頼み甲斐ないものとすると、强者の哲學も存外頼み甲斐ないものである。

二

而も人間は出來る丈け長生せんことを欲求する。能ふべくんば永遠に生きんことを欲する。

永遠に生きんとすることは神佛に近づがんとすることである。少しでも生き長らへんとすることは、人間以上にならんとすることである。凡々たる人生の水平線を跳び超えんとすることである。これあるが爲に、人間は人間としての價値があり、そこにまた人生の眞意義と、此處に生れて來た

意味があるのである。

只生れて、只活動して、只食つて、只死ぬ。それが人類の文化を進めることに中心を置かれてをらぬ時に、單なる並々の凡々人のすることである。

凡々人と生れて凡々人として死ぬ。　只ぼんやり考へると、それは面倒がなくて至極結構ではあらうが、個人として人類として、それを滿足するのは愚の至り、亂暴の極、罪惡の極である。國家社會から徒らにそれをほめられるのは如何にも馬鹿にされた話である。無爲にして死に、現實に生きんが爲にのみ活動する。實にこれ悲慘といふよりも呪ふべき禍である。

現實の人生が不滿足なものであればあるほど、頼み甲斐のないものであればあるほど、私達はいよ／＼人類文化を進めることに向つて努力を費し、現實の人生よりも十年でも百年でも長生することに希望をおかなければならぬ。凡々たる現實の人生以上を生きることは、それ丈け人類の文化を進めるといふ大理想に近づき、神に近づくことであるからである。

人間の世の眞の仕事は此外に何もあり得ない筈である。

茫々漠々としてつかみ所なきが如き人間生活に於て、燦然としてきらめく此光に接する時に、現實に生くるに始めて輝かしい希望が湧き立つて來るのである。

凡々たる人生以上の仕事！　此輝を見出すものこそ、眞に生くることの喜を知るものである。

友達の一言

或時私の一人の親友は、勤め先で烈しい胃痙攣に襲はれました。

友達が下宿に歸るのをいやがるのと、病狀がなか〳〵重かつたのとで、私は彼を、自分の知つてゐる病院に入院させました。病院は丁度、私が毎日電車を乘換へる所にあつたので、夕方勤先からの歸りには、私は屹度立寄つて友達を慰めてやりました。淋しい友達は私の顏を見ると、いつも戀人でも迎へるやうに喜びました。そして私が歸らうとすると、

「もう君歸るのかね、もつと居てくれたまへよ。ね、もう十分、もう五分でいゝからね」

といつて、どうしても私を歸へしませんでした。暫くして私がまた腰をあげようとすると、

「君もう五分、ね、もう三分でいゝからね」

友達はかういつてまたぢつと私を傍へ引寄せて置かうとするのでした。私が病室にはいる時の、嬉しさうな輝かしい彼の顏附に比べて、殆んど例へやうもない程の、打しほれた、淋しげな彼の姿を見ると、私はどうしてもその儘振り切つて歸る氣にはなれませんでした。私の家に歸るのは、かうして夜の九時十時になることがよくありました。

友達の病氣は三週間ばかり續きました。私はその間一日として、友達を見舞はない日はありませんでした。今日はその儘歸らうかと思ふ樣な日もないでは有ませんでしたが、さうした時に考へ直すと、

すつと歸ることは、何だか罪でも犯すやうな氣さへしました。そして遲くなつた日でも、必ず友達を訪ねて慰めてやりしました。こいふよりも、私はかうして友達を慰めてやるとが、自分の喜びの一つであるやうにさへ感じたのでした。いやそれよりも、毎日此淋しい友達を訪れて慰めてやらないではゐられない位に、私は彼を好いてゐたこいふ方がいゝかも知れませんでした。

友達は私の鄕里の隣村の生れであり、殆んど私のと同じやうな趣味をもつてゐました。そして平生から非常に仲よくして親しんでゐたのでした。

一年ばかりすると、私は可成りに危險な病氣にかゝつて、三月ばかり床につきました。私は毎日友達のことを思つてゐました。遊びに來て呉れるといゝな、見舞に來てくれるといゝなと思ひつゞけました。けれども友達は遂に、一度も顏を出しませんでした。そればかりか、その友達からも、他の同じ勤先の何れの友達からも、遂にはがき一本さへ來ませんでした。何の酬ひを求める心もないながら、私はしみ〴〵と人生の淋しさを味ひました。全快して勤先に出ると、友達は只一言いひました。

「や、もういゝかね」

私の顏は笑つてゐましたが、直ぐに千仞の谷底へ蹴込まれたやなう淋しさが込み上げて來ました。が暫くの後には、口先ばかりの同情よりか、この方が遙にましだと思つて、私は密かに友に感謝さへしました。與へられることの一切よりも、自から心から與へようとする小さなことにすら、私の心は喜びを感じ得るやうに、それから後は方向轉換をしたからでした。

黒き一線

生命は眞赤な色と輝かしさをもつて伸びてゆかうとする。

無限に伸びようとする生命の力の上に、眞黒な一線がすつと下りて來た時に、個體の生命は伸びゆく力を遮られる。人間の活動はやむ、眼は閉づる、肉體は固體から瓦斯に形をかへてしまふ。

生々とした人間の姿が、固體から瓦斯に還元してしまふ時に、生命力はどうなつてゆくであらうか。生命も瓦斯になつてしまふであらうか。私は瓦斯にのみ還元されてしまふものと、文化といふ形に變つてゆくものと、明かに二つの生命力の姿を見とめたい。

瓦斯と文化！　似てゐるけれど雲泥の差がある。瓦斯は再び活動の機會を得るまでそれの伸展はないが、文化には限りを知らぬ永遠の進歩がある、發展がある。文化は個人の生命であると同時に人類の生命である。人間の生命である。

瓦斯は人間が之を創造することは出來ないが、文化は之を人間が創造することが出來る。

偉大なる文化の創造、光輝ある文化の創造、進展してやまざる美はしい文化の創造、之れやがて人間生活の使命であり又個人の目的であらねばならない。かうした文化は人間にとつて最高のものであると同時に、完全なる永遠性をもつてゐるからである。

有ゆる爭鬪、有ゆる苦惱、有ゆる煩悶、一切の努力、一切の活動、それは皆此偉大なる文化の創造に向つて進められてこそ、意義があり、美しさがある。他の一切の人間の活動と努力と苦惱と爭鬪とは、皆此最後の目的に達するまでの準備であり階段でなくてはならない。準備と階段とを目的と意義と混同する時に人生は無意義である。

無意義なる人生を生活する時に、現實生活は無駄なる努力と活動に終る。人生が無駄なる努力と活動に終る時に、私達の前に眞黒な一線が引かれると、個人の形態は單なる瓦斯に歸するのみである。

單なる瓦斯に歸するに過ぎない人生を生活することによつて、私達は滿足して生を終ることが出來るであらうか。それで滿足したとすれば、私達の一生は既にさう感じたずつと以前に於て終を遂げてゐるのである。

だが、私達は單なる瓦斯に終りたくない。私達の肉體は死んでも、生命は出來る丈け長生がしたい。人生の最高なる文化創造の、小さくとも、一つの役を果し、果さうとすることによつて、吾々は眞の生活を生き得る。此意味に於て私達は絶えざる努力を繼續しつゝあるのである。

かう考へる時に人間の生活の意義と人生の目的とは非常にはつきりとして來る。只生きることは無意義である。生きるが爲に生きようとすること、それは只瓦斯の幽靈として甘んずることである。無意義であるよりも罪惡である。此意味に於て、文化創造の役を果さうとする高遠な理想をもたないで、單に現實生活にのみ終始する生活は、徒らに銅像を建立し、墳墓を飾らんとしてもがく

と何の選ぶ所はない。あはれといふよりも寧ろ氣の毒である。

眞黑な一線の前に跪いて、徒らに恐怖し悶絶するものをして、悶絶せしめよ、恐怖せしめよ、瓦斯に歸らしめよ。文化創造を中心として見る時に、これまで人は餘りに多く只生れ只死んだ。餘りに多く自然の奴隷とのみなり終つて、眞の人間ではなかつた。餘りに多く動物であつた。

人間あつて以來、人間の生れた數は幾千億萬あつたことであらう。そして眞に文化創造を成就し得たり、又は成就せんとして努力し來つた人間の數が幾何あつたであらうか。顧みると人生に對して、眞黑な一線を引く大使命を與へられてゐる皮肉なる死神の功勞は、眞に讃美の極みを超えたものである。

私は死を讃美する。死を禮拜する。偉大なる永遠の生を讃美するが故に死を禮讃する。形骸のみの生を呪ひ、瓦斯にのみ還元する生を呪ふが故に死神の前に脆く。

物質の世界にのみ憬れ、永遠の生命に憬れる事を知らない幽靈が人生に充滿したらどうであらう。高遠な文化の創造に人生の目的を置かないで、只徒らに瓦斯と消ゆべき肉體の五慾を滿足せしむる爲にのみ、生きんとする亡國の群が人生に溢れ來たつたらどうであらう。思つた丈けでも私は戰慄する。五慾の塊を掃ひ、十慾の權化を亡ぼして、文化創造の眞理を暗示する死神に光榮あれ！

物質にのみ生きようとする人間に對して、眞の人間の目的を暗示する爲に、もつと死神が活躍することを私は望んでやまない。

俳句の本質と川柳

一

俳句のもつ本質をよくさびであり、さびしみであるといふ。成る程それは俳句の生命であり主要素であるに違ひないが、此さびとかさびしみなどいふものは、これまでのやうに、必ずしもせまい局限されたものとのみ考へる必要はない。私は此寂びとか寂し味といふものを、ずつと〳〵廣義に解して、現象に伴ふ一切のニューアンスと見たい。そして此ニューアンスといふ語もまた非常に廣義に解して、俳句の本質を此處まで押廣めて見るべきだと思ふ。

俳句を單なる文字丈の詩だと思つてはいけない。そこに寂し味もある、哲學味もある、超現實味もある、理外の理もある、唯物觀以上の世界もそこに存在し、神秘の味もそこに溢れてゐる。

ロマンチシズムの世界、ミスチシズムの世界、リアリズムの世界、シムボリズムの世界、さうした樣々の世界の意義が錯綜して成つたのが俳句の世界である。俳句のもつニューアンスの世界は實に廣漠である。それにも係らず、その一方面からのみ解することによりて俳句を知らうとするのは餘りに無理なことである。

文字はシンボルに過ぎない。文字に現はれた世界が俳句の全部ではなくして、文字の背後に隠れた世界がむしろ俳句の世界であり、俳味である。文字の世界は十中の一である。十中の一のみを解し、他の八九を解せずして、何で俳句をよく理解することが出來よう。これまでの外人が俳句をよく外國語に譯し得て居ないといふのはこれが爲である。俳句の本質を理解し得ないで、俳味そのものが分らないで、文字が讀めた丈けでは、俳句の移植などは出來ることではない。

二

俳句の世界は和歌やその他の詩がもつてゐる普通の詩の世界ではない。容易に叙述することの出來ない、直感によつて始めて感得し得る複雜なるニューアンスの世界である。陰影の世界である。光明とか光輝とかの中にも含まれてゐる陰影の世界である。暗黑の中にも潜んでゐる光明の世界である。隆々たる力の中にも隱れて、その力の弱さと果敢さとを嘲つてゐる香味である。烈風の底にもひそんでゐる靜けさである。苦みの陰にもかくれてゐる輝かしい樂しさである。樂みの中にも笑つてゐる悲みである。死の底にも躍動してゐる生氣であり、生活の眞只中にもひそんでゐる靜けさである。瞬間の裏の永遠であり、永遠の前の瞬間である。俳味はかうして到る處に旺溢し、行くとして俳味の存せざるはない。

かくして俳句は詩であると同時に禪であり、禪であると同時に哲學であり、バラドツクスであり、理外の理境であり、眞理の外の非眞理であり、非眞理の外の眞の世界でもある。唯物觀外の世界であり、純東洋的の世界であり、純日本人の世界である。

かくの如く幽妙神秘にして、現實的であると同時にまたロマンチツクであり、象徴的であると同時に哲學的でもある俳句の世界は、文字をもつて代表されたシンボルの世界のみから論ずべきでもなければ、想像を主としたロマンチツクな詩の世界からのみ說くべきではない。其處には理窟を外れた直觀もなければならないが、說明を無視し、現實を超越した叙述も許さなければならない。

聯想を豐富にし內容を明晰にするに必要な切れ字を用ふるとか、季節を表はす字を入れるなどいふことは、どうでもいゝにしても、現實につき過ぎたり、理窟に囚はれたりすると、自ら散文の世界に脫線して詩の世界を忘れる。極端な新傾向は其處に誕生する。文字に現はれた象徴のみに重きを置きて俳味の本質を構成する他の樣々な意味を忘れると、ロボツトを以て人間に優ると斷ずると同じ弊に陷る。ロボツトはどこまでも器械的である。これまで俳句を外國語に移植したものゝ多くの陷つたのは此弊であつた。大部分の俳句が移植しにくいといふのは此弊を裏書するものである。それ〳〵の國語がその性質を異にし、其國語のもつ史的興味も異るが爲に、移植に際して、生きた人間が人間にならなくて、ロボツトになるからである。人間の精神生活が傳へられないで、形態的活動のみが傳へられ勝ちだからである。俳句のもつニューアンスが容易に傳へられないで、外形の

みが傳へられ勝ちだからである。

三

俳句を學ばうとするものゝ先づ陷り易い弊は、之を川柳と混同することである。川柳の有する特殊な味は、諷刺である、皮肉である、洒落である、滑稽嘲笑である。而も斯るものを表面に見せずして、それとなく蔭にてさとらせるのが川柳である。文字の裏に隱れたものをねらふといふことは俳句と似てゐるが、川柳の示す所のものは裏に隱れた意味である。詞の裏に包まれた意味を暗示し情景を諷刺し嘲笑を表現するのが川柳の目的である。表面には出來る丈け情景を描かないで、裏面に暗示された事實を智的に理解させるのが川柳である。そこに最も必要なものはウイットである、ユーマーである。そして表面の意味は示さないといつてゐるけれども、蔭に隱れた事は省略せずして餘す所なく叙述されてゐるのである。叙述の方法が省略的であるが如くにして實は非省略的である。

俳句は之に反して、表面の情景を隱すことなくして、立派に表現し、表現された象徴的な文字が示す情景によつて、その文字が、暗示する所の樣々な陰影を聯想せしむるに過ぎないのである。裏に隱れた意味をさとらせるのでなくて、表面に表はされた情景を、味ふことによつて、その蔭に含

まれた味を、理智的でなくて感情的に味はせるのである、直觀的に想像させるのである。川柳が裏面に隱されたものを理智的に理解することを要求するのとは甚だ趣がちがつてゐる。

川柳がウイット的でありユーマー的であることを目的とするに反して、俳句は必ずしもウイットのみを求めず、ユーマーのみを求めない。偶作者の個性の現はれが皮肉な味や、滑稽味をもち、頓才的であつたとしても、それは俳句の一面に過ぎないで、川柳のねらひが徹頭徹尾頓才と滑稽に終始してゐるのとは、スケールの大きさがちがふのである。そしてそれ丈け俳句の世界がずつと大きいのである。

四

久しい間の俳句は十七字の形式に限られてゐた。けれどもそれは、發達の經路がさうであつたといふに過ぎないのであつて、十七字に限る必要はないが、この十七字に限るところに俳句の面白味もあるといへばいへる。世界に類例のない最短詩形の中に、絶大の表現をなし得るからである。時としては和歌よりも、一篇の戯曲よりも、小説よりも、無限の味を有する表現をなし得るからである。和歌が三十一字をもつてしても、容易に表はし得ない大きな世界を、無限の俳味を大きな情景を、僅に十七字でもつて堂々と表はし得る所に俳句の力があり尊さがある。そこにまた川柳と異つ

て、極端な省略の必要が起つて來る所以がある。川柳が散文的の叙述をやつてさしつかへないに反して、俳句が出來る丈け省略をやらねばならぬのはこれが爲である。叙述し切れぬから、省略によりて聯想させようといふのである。その省略が極端になり形式化して、かなとなり、けりとなり、やとなつたのである。新しい傾向の俳句が十七字を無視するのは一向さしつかへないけれども、出來る丈け短詩形の中に包容しようとする俳句の本旨との大きな矛盾が自ら其處に生れる。

有ゆる無意義なる形式の破壞、餘計な傳統の打破、新時代はかうして生れるのであるが、人間を殺してロボットをつくり、俳句を殺して散文詩をつくることは、既に出發する時の意義と變つてゐるものと見るべきである。

俳句は川柳ではない。ロボットは人間ではない。散文詩は俳句ではない。詞のみは、文字の羅列のみは俳句ではない。文字の表はすシンボルと、その蔭にかくれたニューアンスと合して始めてことに俳句が生れ俳句の世界が存在する。

うすものに文身の龍躍りけり　五丈原
燕や三十三間堂の雨　酒竹
風鈴の鳴らんとしてはやみにけり　紫蘭

明治前俳句抄

春の部

心から大きく見ゆる初日哉　一茶
あばらやの其身其儘明の春　同
這へ笑へ二つになるぞ今朝からは　同
門松やうしろに笑ふ武庫の山　鬼貫
伽羅臭き人の假寢や朧月　蕪村
さしぬきを足でぬぐ夜や朧月　同
霞む日や夕山蔭の飴の笛　一茶
霞む日やしんかんとして大座敷　同
雉子の尾の引摺つて行く霞哉　同
舟人の引いて上るや夕霞　同
陽炎や手に下駄穿いて善光寺　同
陽炎にぱつくり口を蜊哉　同
陽炎や臼の中から眞一筋　一茶
春風や煙管咬へて船頭殿　芒蕉
春風や堤長うして家遠し　蕪村
春風や牛に引かれて善光寺　一茶
春風の女見に出る女哉　同
春雨やものかたり行く簑と傘　蕪村
春雨に大欠伸する美人哉　一茶

彌生晦日の雨

春雨のけふばかりとて降に鳧　鬼貫
門前や杖でつくりし雪解川　一茶
春水や四條五條の橋の下　蕪村
烏帽子着て誰やら渡る春の水　同
春の海終日のたり〳〵哉　同
苗代にうれしき鮒の行方哉　同
もたいなや花の日永を身に困る　一茶
日が永い〳〵とのらり〳〵哉　同

永き日や牛の涎の一里程　一茶
老いぬれば日の永いにも涙哉　同
永き日や沈香も焚ず屁もひらず　同
大口をあいて鴉の日永哉　同
春の夕たえなんとする香をつぐ　蕪村
ゆさ〳〵と春が行ぞよ野邊の草　一茶
死花をぱつとさかせる佛哉　同
今ひとつ雛の目をせよよい娘　同
居並んで達磨も雛の仲間哉　同
古雛やがらくた店の日なたぼこ　同
持たすれば雛をなだむる子供哉　同
おらが世やそこらの草も餅になる　同
出代の市にさらすや五十顏　同
彼岸とて袖に這はする虱哉　同
中日と知つてのさばる虱哉　同
畑打や我家も見えて暮かかる　蕪村
畠打や子が這歩行く土筆原　一茶
畑打や勁かぬ雲もなくなりぬ　蕪村
來るも〳〵下手鶯ぞおれが垣　一茶
これ程の上鶯を田舍かな　同
草麥や雲雀があがるあれ下がる　鬼貫
雲雀より上に休らふ峠かな　芭蕉
長き日を囀り足らぬ雲雀哉　同
晝飯をたべに下りたる雲雀哉　一茶
大佛の鼻から出る燕かな　同
我と來て遊べや親のない雀　同
連のない雁もさつさと歸りけり　同
夕月や鍋の中にて鳴く田螺　同
古池や蛙とびこむ水の音　芭蕉
日は日暮れよ夜は夜明よと鳴蛙　蕪村
風なくて雨降れと呼ぶ蛙哉　同
悠然として山を見る蛙かな　一茶

其聲で一つ踊れよ鳴く蛙　一茶
夕暮に蛙は何を思案橋　同
土手べりに江戸を眺むる蛙哉　同
玉川や先づお先へと飛ぶ蛙　同
我を見て苦い顔する蛙かな　同
痩せ蛙負けるな一茶爰にあり　同
虻一つ豐寢起して廻るなり　同
起きよ〳〵我友にせんぬる胡蝶　芭蕉
賓都留の御鼻を撫でる胡蝶哉　一茶
大笊にふせられはぐる胡蝶哉　同
おんぴら〳〵蝶も金比羅參り哉　同
梅が香にのつと日の出る山路哉　芭蕉
主なきを恨み顔なる野梅かな　同
梅園を南すべく北すべく　蕪村
庵の梅よんどころなく咲きに鳧　一茶
梅折るや天窓のまるい影法師　同

君が代の大飯食ふて櫻かな　一茶
此のやうな末世を櫻だらけ哉　同
下々に生れて夜も櫻かな　同
奈良七重七堂伽籃八重櫻　芭蕉
花に舞はで歸るさ憎し白拍子　蕪村
山の月花盗人を照らし給ふ　一茶
こちとらは花は咲かうが咲くまいが　同
花の雲鐘は上野か淺草か　芭蕉
桃の木へ雀吐出す鬼瓦　鬼貫
古寺の桃に米踏む男かな　芭蕉
櫻より桃に親しき小家かな　蕪村
川は又山吹さきぬ芳野川　一茶
山吹をさし出しさうな垣根哉　同
草臥れて宿借る頃や藤の花　芭蕉
傘で押しわけ見たる柳哉　同
門柳天窓でわけて這入りけり　一茶

野雪隱のうしろを圍ふ柳かな　一茶
下總へ一筋かかる柳かな　同
通ぬけせよと垣から柳かな　同
我國は草も櫻を咲きにけり　同
山路來て何やらゆかし菫草　芭蕉
骨拾ふ人に親しき菫かな　蕪村
菜の花や月は東に日は西に　同
衰へや齒にくひあてし海苔の砂　芭蕉
落花枝にかへると見れば胡蝶かな　守武
花咲いて死にとむないが病かな　來山
梅一輪一輪ほどのあたゝかさ　嵐雪
動くとも見えで畑打つ男かな　去來
何事ぞ花見る人の長刀　同
くさめして見失ふたる雲雀かな　也有
世の中は三日見ぬ間に櫻かな　蓼太
これは〳〵とばかり花の芳野山　貞室

夏の部

五月雨や大河を前に家二軒　蕪村
なげ出した足の先なり雲の峰　一茶
涼しさや都を竪にながれ川　蕪村
涼しさや鐘を離るゝ鐘の聲　同
涼しさやこゝ極樂の這入口　一茶
涼しさや沈香も焚かず屁もひらず　同
涼風やあちらむきたる亂れ髮　鬼貫
あら涼し鉦の音せぬ一心院　同
涼風の曲りくねつて來りけり　一茶
蛤の口しめて居る暑かな　芭蕉
暑き夜をとう〳〵善光寺詣哉　一茶
暑き日の刀にかゆる扇かな　蕪村

言譯に一夕立の通りけり　一茶
音計りでも夕立の夕かな　同
夕立や咬みつくやうな鬼瓦　同
水さぶり佛なりやこそ天窓から　同
乞食町とはみえざりし幟かな　同
御手討の夫婦なりしを更衣　蕪村
更衣金覆輪の鞍置かん　同
下谷一番の顏して更衣　一茶
若い衆は浴衣ぞいざや更衣　同
更衣へて坐つて見てもひとり哉　同
西行は死そこなうて袷かな　蕪村
小原女の五人揃ふて袷かな　同
春日野の鹿に嗅がるる袷かな　一茶
夏衣いまだ虱をとりつくさず　芭蕉
帷子にいよよ四角な親爺哉　一茶
我庵は草も夏痩したりけり　同

母親や納涼がてらの針仕事　一茶
繼ッ子や納涼仕事に藁敲く　同
一尺の瀧も音して夕納涼　同
月さへもそしられ給ふ夕涼み　同
田の人を心で拜む晝寢かな　同
人並に晝寢したふりする子哉　同
蓮の葉に片足のせて晝寢かな　同
面白う汗の流るる浴衣かな　同
渡し呼ぶ草のあなたの扇かな　蕪村
膝に置くばかりでも涼し白扇　一茶
橋の欄干にもたれて扇かな　同
手にとれば歩行たくなる扇哉　同
褌に團扇さしたる亭主かな　蕪村
貌白き子のうれしさよ枕蓆　同
蚊遣火や柴門多く相似たり　同
蚊いぶしも慰になるひとり哉　一茶

もたいなや晝寢して聞く田植歌　一茶
心太さかしまに銀河三千尺　蕪村
時鳥平安城を筋違に　同
蝸牛何思ふ角の長みじか　同
夕立や大肌ぬいで蝸牛　一茶
蟬なくや山からみゆる大座敷　同
閑さや岩にしみ入る蟬の聲　芭蕉
頓て死ぬけしきは見えず蟬の聲　同
人一人蠅も一つや大座敷　一茶
侍に蠅を追はせる御馬かな　同
やれうつな蠅が手を摺る足を摺る　同
大螢ゆらり〳〵と通りけり　同
晝の蚊やだまりこくつて後から　同
蚊柱の穴から見ゆる都かな　同
鎌倉を生きて出でけん初松魚　芭蕉
芝浦や初松魚から夜が明ける　一茶

絶頂の城たのもしき若葉かな　蕪村
天晴の大若竹ぞ見ぬ中に　一茶
夏草や兵どもが夢の跡　芭蕉
巡禮の棒ばかりゆく夏野かな　重頼
目には青葉山郭公初鰹　素堂
夜着を着てあるいて見たり土用干　其角
文もなく口上もなし棕五把　嵐雪
渡りかけて藻の花のぞく流かな　丈艸
啞蟬の鳴かぬ梢もあはれなり　杉風
破鐘の響も暑し夏の月　北枝
井戸掘の浮世に出たる暑さかな　也有
角出して這はでやみけり蝸牛　大祇
飛石にとかぎの光る暑さかな　同
傘さして吹かれに出でし青田哉　白雄
五月雨や或夜ひそかに松の月　蓼太
とう〳〵と瀧の落ちこむ茂り哉　士朗

秋の部

荒海や佐渡に横ふ天の川　芭蕉
三日月を睨めつめたり蟬の殼　一茶
名月や池を廻りて夜もすがら　芭蕉

義仲寺にて

三井寺の門敲かばやけふの月　同

矢釜しかりし老妻今年はなく

小言いふ相手もあらば今日の月　一茶
樅の木のすんと立たる月夜哉　鬼貫
我宿は四角な影を窓の月　芭蕉
月今宵めくら突當り笑ひけり　蕪村
月天心貧しき町を通りけり　同
庵の鍵松に預けて月見かな　一茶

猪も共に吹かるる野分かな　芭蕉
唐紙の引手の穴を秋の風　一茶
秋風のふきぬく四條通りかな　同
石山の石より白し秋の風　芭蕉
物いへば唇寒し秋の風　同
秋風の再び倒す障子哉　蕪村
白露や無分別なる置ところ　宗因
露の世は露の世ながらさりながら　一茶
夕霧や馬の覺えし橋の穴　同
有明や淺間の霧が膳を這ふ　同
二軒家や二軒餅搗く秋の雨　同
溫泉の底にわか足見ゆる今朝の秋　蕪村
秋の夜や障子の穴が笛を吹く　一茶
きりぐ〜す自在を登る夜寒哉　蕪村
六十に二つ踏みこむ夜寒かな　一茶
肋骨撫でずとすれど夜寒かな　同

から樽を又ふりて見る夜寒哉　一茶
一人と帳面につく夜寒かな　同
老が身は鼠も引かぬ寒さかな　同
枯枝に烏のとまりけり秋の暮　芭蕉
秋の暮辻の地藏に油さす　蕪村
膝だいて羅漢顔して秋の暮　一茶
此道や行く人なしに秋の暮　芭蕉
去年より又淋しいぞ秋の暮　蕪村
行秋を尾花がさらば〳〵かな　一茶
見渡せば眺むれば見れば須磨の秋　芭蕉
後家の秋ものの哀を留めたり　同
送られつ送りつ果は木曾の秋　芭蕉
四五人に月落かゝる踊かな　蕪村
御佛の留守事に大踊かな　一茶
遠近をおちこちとうつ砧かな　蕪村
人に似よと老の作れる案山子哉　同

畠主の案山子見舞ふて戻りけり　蕪村
姓名は何子か號は案山子哉　同
人はいさ直な案山子もなかりけり　一茶
身の老や案山子の前も耻かしき　同
三度啼て聞へずなりぬ鹿の聲　蕪村
不性鹿鳴き放してはねたりけり　一茶
行水の捨ところなき虫の聲　鬼貫
鳴な虫默つて居ても一期なり　一茶
寢かへりをするぞ脇よれ蟋蟀　同
蟋蟀身を賣られてぞ鳴きにけり　同
虫も鈴振るや住吉大明神　同
柿の木であいと答へる小僧哉　同
大きさや人の拾ひし栗の毬　同
團栗のねん〳〵ころり〳〵かな　同
朝顔や人の顔にはそつがある　同
朝顔に貸して咲かせし庇かな　同

朝顔に涼しく喰ふや一人飯　一茶
大名と肩並べけり菊の花　同
此寺は庭一ぱいの芭蕉哉　芭蕉
白露もこぼさぬ萩のうねり哉　同
女郎花一夜の風に袁ふる　一茶
鬼灯や七つ位の小順禮　蕉村
鬼灯を膝の小猫にとられけり　同
鬼灯をとつてつぶすや背中の子　同
餘所並に面並べけり馬糞芽　一茶
人の世に尻を据へたる瓢かな　蕉村
順禮の目鼻書ゆく瓢かな　同
浮世の月見過しにけり末二年　西鶴
名月や疊の上に松の影　其角
名月や烟這ひゆく水の上　嵐雪
黄菊白黄其外の名はなくもがな　同
稲妻にへな〳〵橋を渡りけり　一茶

冬の部

靜なる樫の木原や冬の月　蕉村
寒月に立つや仁王のからつ脛　一茶
木枯や岩に裂け行く水の聲　蕉村
旅人と我名呼ばれん初時雨　芭蕉
初時雨猿も小簑をほしげ也　同
宿錢に奥淨瑠璃や夜の霜　一茶
霜百里舟中に我月を領す　蕉村
一散に飛んで火に入る霰かな　一茶
いざさらは雪見に轉ぶ處まで　芭蕉
雪の戸や押せば開くと寢てて言ふ　一茶
宿かせと刀投出す吹雪かな　蕉村
門口へ來て氷るなり三井の鐘　一茶

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る　芭蕉
大とこの糞ひりおはす枯野哉　蕉村
肅條として石に日の入る枯野哉　同
西方の極樂道よ枯野原　一茶
雉子立つて人驚かす枯野原　同
杖ほく〳〵拾ひ日和の小春哉　同
降る雨も小春なりけり智恩院　同
皿を踏む鼠の音のさむさ哉　蕉村
借り具足われになじまぬ寒さかな　同
合點して居ても寒いぞ貧しいぞ　一茶
生殘り〳〵たる寒さかな　同

江戸道中

椋鳥と人に言はるる寒さかな　同
鶯の啼くや師走の羅生門　蕉村
分別の底たたきけり年の暮　芭蕉
影法師も祝へ只今年暮るる　一茶
梟よのほほんどころか年の暮　一茶
何のその首はぬくまい年の暮　同
兎も角もあなた任せの年の暮　同
あたまから蒲團かぶれば海鼠哉　蕉村
船がついて候とはぐ蒲團哉　一茶
住みつかぬ旅の心や置火燵　芭蕉
宿かへて炬燵うれしき在ところ　蕉村
づぶぬれの大名を見る炬燵哉　一茶
鍋敷に山家集あり冬籠　蕉村
太刀疵を一つばなしや冬籠　一茶
麥蒔の影法師長き夕日かな　蕉村
一握の麥を蒔ぞよ門雀　一茶
菴の煤風が拂つて呉れにけり　同
年忘三人寄りて喧嘩かな　芭蕉
都かな橋の下にも年忘　一茶
我庵やたつた一人も年忘　同

餅搗や棚の大黒にこ〳〵と　一茶
我門へ來さうにしたり配り餅　同
餅搗が隣へ來たといふ子かな　同
思ふことといはぬ樣なる生海鼠哉　蕪村
我朝のものとは見えぬ海鼠かな　一茶
水仙や垣に結ひこむ筑波山　同
大根ひく拍子にころり小僧哉　同
大根引大根で道を敎へけり　同
何思ふ八十八の親持て　鬼貫
月花や四十九年のむだあるき　一茶
油さしあぶらさしつつ寢ぬ夜哉　鬼貫
大三十日定めなき世の定めかな　西鶴
布團着て寢たる姿や東山　嵐雪
應々といへど叩くや雪の門　去來
長々と川一筋や雪の原　凡兆
時雨れけり走り入りけり晴れにけり　惟然

人聲の夜半を過ぐる寒さかな　野坡
蠅一つわれをめぐるや冬籠　曉臺
更くる夜や炭もて炭を碎く音　蓼太
足輕のかたまつて行く寒さかな　士朗
からびたる三井の仁王や冬木立　其角
呼返へす鮒賣見えぬ霰かな　凡兆
追剝のながめて通す紙衣かな　也有
寒月や我ひとりゆく橋の音　大祇
憂きことを海月に語る海鼠かな　召波

明治時代俳句抄

がつくりと拔けそむる齒や秋の風　松風
わが影の壁にしむ夜やきり〴〵す　蓼太
霜天にみち〳〵明くる踊かな　召波
欠伸して月ほめてゐる隣かな　凡董
秋來ぬと目にさや豆のふとりかな　大江丸
名月に露の流るゝ瓦かな　士朗

新年の部

元日の借着の羽織長かりし　杷栗
元日や寺にはいれば物淋し　碧梧桐
元日や一系の天子富士の山　鳴雪
元日や納屋も厩も梅の影　鳴雪

乞食

元朝や米くれさうな家は何處　子規
元日の城門開く雪景色　香村
元日の船より見たる日本かな　木公子
大空や日本晴の四方拜　こてふ
四方拜に一燈灯す佛かな　瓠瓜
四方拜宮の諸門を開きけり　羊水
君が代や三千年の初日の出　白羊
初日さす朱雀通りの靜かさよ　碧梧桐
松飾似てゐて門の違ひけり　有田樓
淀川や輪飾かゝる水車　水巴
加賀樣の御門見ぼるゝ飾かな　兎子
輪飾や新年會の小料理屋　虚子
大飾りふさと垂れつゝ風もなし　鳴雪
松の内を舞子のやうな娘かな　虚子
門松や村一軒の分限者　繞石
門松や村一軒の旅人宿　鳴象
門松や加賀宰相の朱の御門　巴東
其聲の跫爪らしき御慶かな　白陽
いち早く電話の御慶來たるかな　大羽
氣に食はぬ人も御慶にお出かな　紅葉
錢湯に裸同士の御慶かな　鳴雪
鎌倉は和田一門の雜煮かな　虚子
新婚の世帶かしこき雜煮かな　碧梧桐

初夢の其逆夢の落馬かな　句佛
福引のこれは起上り小法師哉　洒竹
痩馬をかざり立てたる初荷かな　子規
屠蘇に醉うて寢てしまふたる火燵哉　杷栗
歌がるたむべ山風の一嵐　三子
下手糞のからかけ聲や歌かるた　射石
振袖に手もとの歌るた乱れけり　繞石
追羽子の墨のまゝゆく町湯かな　孤村
追羽子に墨ぬられじのわめき哉　汲花
突きもせで羽子板を持ち廻りけり　鬼史
羽子板の打つや風ほど柳腰　紅葉
遣羽子に久松もまじり美しき　虚子
それ羽子や落ちて流るゝ鴨の水　松濱
買初の賴まれにけり凧二つ　八重櫻
初賣や昔ながらに河岸の意氣　三允
軒並や初商の衣紋つき　紅葉
舞初や五本扇の松づくし　橘堂
彈初の春を着飾る娘かな　神風
彈初や振袖たるゝ青疊　苔雨
彈初や下り藤なる三の糸　射石
双六や川止め三日大井川　兎子
三十三間堂の佛の數や手毬唄　四水
顧みて他を言ひつゝの手毬かな　雪府
袂から出して見せたる手毬かな　月村
清水の舞臺を落つる手毬かな　水巴
萬歳の萬歳に逢ふ會釋かな　墨水
萬歳や幾日都の日和下駄　碧童
初東風や不二見下して梯子乘　鳴雪
叱られて小猿の舞ふも哀れなり　五工
猿引の逢ふて別るゝ渡しかな　曆樓
猿引の犬を叱りて去りにけり　雪人
若菜つみ〳〵京の日は暮れぬ　鳴雪

春の部

春雨の船に灯ともり流れけり　酒竹
春雨や拳打つ影の大いなる　瓊音
春の雨居るかといへば居るといふ　小波
景清の番傘さして春の雨　鳴雪
春雨や佛の居間に來る燕　魏象
春の雪鼓荷ふて通りけり　呼潮
雀子や走りなれたる鬼瓦　鳴雪
西陣に織物を見る春日かな　虚子
金殿に灯ともす春の夕かな　同
春の夜の鏡に赤き覆ひかな　里静
春風や京の舞子の美しき　墨水
驢馬に乘つて地につく足や春の風　一樹
春の川手紙まろめて流しけり　鳴雪
上京や友禪洗ふ春の水　碧梧桐
物かはと女渡りぬ春の水　四明
春の水洛陽の夜を流れけり　霽月
草籠をおいて人なし春の山　子規
江戸人は上野をさして春の山　同
旅人や右富士左春の海　水巴
春の月一重の雲にかくれけり　子規
大名の忍びあるきや朧月　同
鴛鴦の流るゝ水や春の月　雨六
人形店春の月夜にならびけり　癯骨
春の月大河油の如くなり　芦水
嫁入の荷持が歸路や春の月　里石
五六騎のゆたりと乘りぬ春の月　碧梧桐
稚子二人寺にかへるや春の月　四明
此邊はよう似た家や梅の花　向陽

梅ちりて鶴の子寒き二月かな　鳴雪
梅三株漁村を守る社かな　虚子
鶯やしんかんとして南禪寺　子規
鶯に朝飯おそき下宿かな　鳴雪
鶯や文字も知らずに歌心　虚子
長閑さをいはんや君が長い顔　西男
川舟の遲々として人長閑なり　大羽
のどかさや障子あくれば野が見える　子規
欠伸した口に花ちる日永哉　同
うたゝ寢を針にさゝれる日永哉　同
蒟蒻ののびさうになる日永哉　同
永き日を酒落ばかりいふ男かな　酒竹
永き日に先客を待つ床屋かな　西男
伐り出す木曾の檜の日永かな　鳴雪

送別

永き日や欠伸うつして別れゆく　漱石
永き日の佗人に糸を卷かせけり　蝶衣
陸軍省建築用地の菫哉　子規
筆筒にさして短き菫かな　春沙
菫程な小さき人に生れたし　漱石
菜の花の中に小川のうねり哉　同

忌

燕や忌中の軒を出つ入りつ　三允
燕や三十三間堂の雨　酒竹
燕や矢走の舟は今出でし　碧梧桐
洗濯の盥を覗く燕かな　三子
風呂敷の穴や首出す土筆　紫人
香具山は土筆の丈に見えにけり　蝶衣
門しめに出て聞てゐる蛙哉　子規
蓮の葉にうまく乘つたる蛙哉　同
一問を一齊に問ふ蛙かな　六花
行く人の履になつてしまひけり（送別）　子規

霞む野や森を離れて杉一本　虚子
蝶ひら〳〵天下の春をほしいまゝ　竹冷

行脚の笠に題す

道連れは胡蝶をたのむ旅路哉　子規
大將の蜂にさゝれぬいくさ事　碧梧桐
山吹の落花をあびて緋鯉かな　三子
人去て五條の橋の朧かな　素翠
海棠や軒にあふむの宙返り　子規
四君子の野暮を笑つて柳かな　小波
野遊や犬先づ走る北野道　狄人
東にしてけん〳〵の花凋れたる　向陽
朝見れば笑ひこけたる雛哉　子規
逆さまに雛をだいて泣く子哉　黄木
くり〳〵と肥えたる裸雛かな　百雷
日あたりや江戸を後ろに畑打つ　鳴雪
太平の城美しき田打かな　紫陽花

大凧の靜に降る雨の中　鳴雪
ある時はまねて落ちけり凧　子規
かゝり凧奴は骨となつてけり　同
つく鐘を啞の見てゐる彼岸かな　同
乞食の子も孫もある彼岸かな　鳴雪
旅にして一僧と知る彼岸かな　水巴
出代りの英語をつかふ別れかな　子規
出代りのぶしつけに問ふ御給金　四明
ありなしの尾を振戯れて子猫哉　麥人
竹緣を踏わる猫の思哉　子規
花散るや寂然として石佛　同
一重づゝ〳〵散れ八重櫻　同
死ぬものと誰も思はず花の春　同
殿方に手をひかれたる花見哉　同
花盛知らぬ男のいだきつく　同
盃の花押し分けて流れけり　鳴雪

山寺はお茶一椀の櫻かな　鳴雪
花一山紫衣の僧あり白衣あり　同
鳥目も落花も盲女の狹莚に　松濤樓
煩惱の花の都と鐘が鳴る　句佛
旅淋し櫻に人を垣間見て　虚子
落したる錢あきらめて春のゆく　初聲
白牡丹ある夜の月にくづれけり　子規
新年の柩にあひぬ夜中頃　同
門番に餅を賜ふや三ヶ日　同
朧夜や悪い宿屋を立出づる　同
一錢の釣鐘つくや春の風　同
日一日同じ處に畠打つ　同
鶯の湯殿のぞくや春の雨　同
出女の聲の中飛ぶ燕かな　同
若鮎の二手になつて上りけり　同
春の夜や奈良の町家の掛行燈　同

夏の部

東海道五十三次青嵐　洒竹
青嵐お夏狂亂のたもと哉　醒雪
時鳥けふは聾の婆一人　子規
一山の僧皆寢たり時鳥　片帆
すさまじき兵の鼾や時鳥　無爲坊
時鳥雲割れて月大いなり　安暇
時鳥月の淡路へ鳴き渡る　魚里
清十郎呼ぶか雲間の郭公　殘花
晝中や蟬の集る大榎　子規
山門の仁王に迫る若葉かな　醒雪
夕立の來て蚊柱をくづしけり　子規
夕立や辻説法の半ばより　露石

夏山の城あり〳〵と夜明けたり　鳴雪
女二人話す戸口や夏の月　子規
裸馬に二人乗りゆく夏の月　四明
ぞろ〳〵と馬の子通る夏野かな　木太郎
牛一つ離れて走る夏野かな　魚鱗
女多き四條五條の涼かな　虚子
涼しさや下駄引ずつて寺の門　醒雪
水涼し影が伸びたり縮んだりす　麥人
涼しさや客も主じも眞裸　子規
涼しさやくるり〳〵と冷し瓜　同
涼しさや裸で越ゆる箱根山　同
寢た人を舁いで移すや涼み臺　彩雲
涼み臺こそぐり合つて少女共　七狂
涼み場を乞食のしめる晝寢哉　子規
留守の家にひとり燃たる蚊遣哉　同
蚊遣火の闇や泣きなく子五人　虚堂

蚊遣焚く女は乳のあらはなり　水巴
蚊帳の中寢言の君を覗きけり　泊雲
鴨川の風吹き孕む絽蚊帳かな　松濱
大風に蝙蝠飛ぶや島の月　乙字
蝙蝠や暮色に長き渡月橋　天郎
露となり螢となつて消えにけり　子規
仲よしの禿二人や螢籠　烏不關
一門の奢侈を極めて螢狩　法經堂
湯の中で鉢卷にした菖蒲かな　臨風
羅に文身の龍躍りけり　五丈原
夏羽織ぞろりと阿呆息子かな　瓊音
心太活きて咽喉を走るかな　同
心太鬼一口につる〳〵と　虚子
寢そべりて蠅打つ人や晝永し　水巴
兵法を學ぶ小兒や蠅叩き　巨口
夕汐に軍馬の汗を洗ふかな　琅々

汗しとど裸に蓆を着て登る　木兆子
宵月や桑の葉にかくれ行水す　子規
行水に夫呼ぶ背戸の畠かな　同
泳ぎ出せば我犬吠ゆる汀かな　鄙躅
風鈴や離れ座敷の女客　紫杏
山の手の淋しき雨や幟竿　三子
夏帽の一人乘りたる電車かな　雨六
短夜や寢られぬ宿の旅日記　同
衣更へてうるさき鬢のほつれ哉　望東
美しき浴衣や誰がおもひもの　醒雪
吉田屋の戸口に誰の日傘かな　辰生
練兵を遠く見てゐる日傘かな　靜處
手品師の蝶あふぎ出す扇かな　法經堂
歎賞の膝叩きたる扇かな　いばら
師直が判官そしる扇かな　紫茗
眠るかと象の鼻打つ扇かな　酒竹

碁の人のしてやつたりと團扇かな　向陽
夏痩の歌かきつける團扇哉　子規
母親に夏痩かくす團扇かな　同
夏痩の猫に物いふ乙女かな　醉夢
夏痩せていよゝ明眸皓齒かな　青嵐
辨慶に夏痩語る女かな　臥雲
囚人のくさり引ずる暑さ哉　子規
初產の髮みだしたる暑さかな　同
炎天を辻の地藏の頭かな　鼠骨
さる程に金魚にも飽く奢り哉　虚子
沖膾鳴門の鯛の骨太き　紫影
甘酒の繁昌釜の光りかな　烏不關
葉櫻の上野は闇となりにけり　子規
荒瀧や滿山の若葉皆震ふ　漱石
叩かれて晝の蚊を吐く木魚かな　同
天下皆馬鹿のやうなり夏祭　殘花

秋の部

立つ秋の風に光るよ蜘蛛の絲　漱石
秋の川眞白な石を拾ひけり　同
初秋が來たぞ小舟でゆら〳〵と　知十
一碗の素湯に秋立つあした哉　雨六
露いくつへちまの尻に出遇ひけり　子規
相呼んで霧の山路を下りけり　句一念
霧雨に雁渡るなり三井の鐘　竹裡舍
霧深くこめし内宮外宮かな　聽松
足もとや霧はれて京の町見ゆる　子規
塔一つ霧より上に晴れにけり　同
朝霧の中に九段のともしかな　同
月の出を窓一杯の芭蕉かな　柴立

名月や蜘蛛の巣に蜘蛛動く見ゆ　句佛
名月や拙者も無事で此の通り　漱石
名月の波に浮ぶや大八洲　子規
寢ころんで緣に首出す月見哉　同
今日の月八百八町の甍かな　臨風
名月の露にぬれたり淡路島　子規
宵月や襖にならぶ影法師　同
海原や何の苦もなく上る月　同
我宿にはひりさうなり昇る月　同
名月や美人の顏の片明り　同
名月や彷彿として筑波山　同
髑こい〳〵とて月になる　洒竹
老をかこつ妻美しや秋の風　碧堂
枯れて立つ唐黍からや秋の風　蘇鐵庵
秋風や廻灯籠の畫廻る　烏健
コスモスの一片殘る秋の風　月郊

亀戸天神

秋風やはり子の龜のぶらん〳〵　子規
秋の風捨子の聲に似たる哉　同
賣物の大名屋敷秋の風　同
褌を隣に吹きし野分かな　九溪
大原女の居すくまりたる野分哉　小波
我聲の吹もどさるゝ野分かな　鳴雪
原へ出て目もあけられぬ野分哉　子規
からかさにつられてありく野分哉　同
燗番や一人夜長の臺所　伊豫守
利殖の事思ひつゞくる夜長かな　極浦
續く不漁を夜長の寢物語かな　黑洲
長き夜を足ふみ伸す一人かな　盧子
辨慶の道具しらべる夜長かな　子規
朝顏の花一鉢の庵かな　碧童
思ひなき人朝顏に對しけり　不喚樓

兵營の前廣々と蜻蛉かな　碧梧桐
畫花火揚る野空の蜻蛉かな　四子
鴛鴦の息杖に飛ぶ蜻蛉かな　白紫
蒸湯出て蜩聞くや蘇る　井泉水
蜩や浪も聞ゆる一の谷　蝶衣
蜩や葦酒山門に入らしめず　青田
蜩や堂守呼べば聾なり　參差
蜩や椎の實拾ふ日は長き　子規
朝寒や一文なしの生欠伸　四丁
朝寒や一刀に竹切り試す　大羽
乞食の錢よむ音の夜寒かな　子規
合宿の齒ぎしり響く夜寒かな　同
提灯で見るや夜寒の九品佛　鳴雪
影法師一つになりし夜寒かな　醒雪
秋寒し蝙蝠傘は杖につく　子規
うき人とはなれ〳〵に踊りけり　繞石

知る人の踊れ〳〵と踊りけり　亞仙寺
踊の輪ひろごり過ぎて崩れけり　水棹
山里は狸のはやす踊かな　華鯨
女にも生れて見たき踊かな　子規
大兵の手振可笑しき踊かな　鼓村
袖なくてうき洋服の踊かな　子規
百年の後人知る墓の芒かな　竹の門
穂芒に月待つ宵となりにけり　水村
山越せば海荒れてゐる芒かな　二星
月の出に大鳥の立つ芒かな　八重櫻
花芒主なき馬の欠伸かな　五丈原
武藏野に月あり芒八百里　子規
夕雨に一山なびく薄かな　同
旅人のともにふかるゝ薄かな　同
砧など打つて遊ばむ山の月　醒雪
亡き妻の砧や殘る虫ばみて　露竹
二軒屋は二軒ともうつ砧哉　子規
一つ家に泣聲まじる砧かな　同
淋しさは裸男の砧哉　同
振袖の地に重たしや菊人形　羊水
菊咲いて功七級の主かな　瓢水
細々と野菊の小路盡きもせず　芳武者
玄關の大衝立や菊の花　雨六
白菊と黄菊と咲いて日本かな　漱石

天長節

旭に向くや大輪の菊露ながら　子規
警察の船も漕ぎゆく花火かな　同
畫花火第一發の響かな　寒山
角力とる二階を叱る主かな　鳴雪
狐鳴いて白萩淋し小野の月　露竹
溪の橋鹿つれて信渡るなり　春圃
鹿の尻叩けは逃げる紅葉かな　三子

腹ばうて西瓜に集ふ殘暑かな　醒雪
醜きが貪り食ふ南瓜かな　同
秋に形あらばへちまに似たるべし　子規
月に立ちて句吐かぬ君は案山子哉　井泉水
案山子から案山子へ通ふ雀かな　小波
君が代は案山子に殘る弓矢哉　子規
鷹の飛ぶ午や鳴子の靜かなる　碧梧桐
何氣なく引けど鳴子のすさまじき　子規
ひとりゆれひとり驚く鳴子かな　同
柿食ふや我馬我を眺めけり　辰生
人を見つゝ柿食ふ枝の鳥かな　幾句拙
此茶屋によき柿ありと休みけり　繞石
稻妻に目たゝきしたる座頭哉　子規
小鰯に交りて蛸の頭かな　三子
秋氣動く玉蜀黍の穗末哉　麥人
秋草や醜からざる女馬士　五丈原
人賤しく蘭の價を論じけり　子規
河鹿啼けば啼かねば更に庵淋し　繞石
朝立や馬の頭に天の川　鳴雪
鶴一つ立つたる秋の姿かな　子規
燈籠の消ゆるにつけて悲しけれ　王城
秋の水山を映して廣きかな　虚子
破れ盡す貧乏寺の芭蕉かな　子規
順禮の木にかけてゆく落穗かな　同
腸の日に照られ居る柘榴かな　紅綠
馬鹿の子の物知り顔や秋の行く　天網子
物憂さに三味もひくなり秋の暮　竹冷
朝寒ぢや夜寒ぢや秋が暮るゝのぢや　紅綠
猿一つ笠きてゆくや秋の暮　子規
猿曳は妻も子もなし秋の暮　同
猿曳を猿のなぶるや秋の暮　同
秋の暮屋根に烏の評議かな　同

冬の部

風に猪首の飛脚走りけり　小波
北風や尻を吹かるゝ都鳥　雨六
占領の夜寂として大雪す　好翠
下駄の雪たゝきの上にころがれり　虚子
埋火の夜は更けけらし竹の雪　酒竹
雪の門村の者ぞと叩くかな　野梅
雪の聲氷の聲となる夜哉　月郊
百尺の杉森閑として雪の中　臨風
遠山の雪見やりつゝ楊枝哉　醒雪
夜の雪に物めく茶屋の二階かな　望東
人と馬とかたまつて行く吹雪哉　雨六
かけ込んで門違へする吹雪かな　鳴雪

初雪や隠れおほせぬ馬の糞　子規
心ゆくや月は千里の雪の上　松宇
着せかける女羽織や雪の朝　西男
我が影に下駄の響や冬の月　紅絲
一歩〳〵君の顧みゆく時雨　露竹
鴉鳴いて伊左が紙衣を時雨れけり　醒雪
あの笠は清十郎か初時雨　小波
背戸あけて家鴨よびこむ時雨哉　子規
美しき布團干したり十二欄　鳴雪
こしらへて見るや蒲團の東山　子規
寒さうに母の寐たまふ蒲團哉　同
小春日や足袋こそばゆき油足　縹雨
ふわ〳〵と海月さまよふ小春哉　鐵庵
張り物に小春ほてりや妻の顔　啞子
杖ついて寺から里へ小春哉　醒雪
蓑蟲の首出してゐる小春かな　翠濤

老僧の爪の長さよ冬籠　子規
手をちゞめ足をちゞめて冬籠　同
ぽつちりと味噌汁寒し膳の上　同
なきあとに妹が鏡の寒さかな　同
入棺の釘の響きや夜ぞ寒き　同
順禮の笠を霰の走りけり　同
我咳の眞似するは何枯野原　虚子
この道に寄る外はなき枯野かな　碧梧桐
白々と國道長き枯野かな　虚子
三日月を相手にあるく枯野哉　子規
ストーブに居残りの傭官吏かな　虚子
よく笑ふ女ばかりの炬燵かな　高瀬川
四方から親子のあたる炬燵かな　方外
私は何も存ぜぬ炬燵かな　瓊音
何もかもすみて炬燵に年暮るゝ　子規
頭巾とれば尊くのびし白髪かな　雅仙

ちと物を伺ひまする頭巾かな　瓊音
頭巾着て飯食ふまでに老ひにけり　子規
寸程の話を尺に榾火かな　虚子
大學を孫に教ふる榾火かな　鳴雪
榾燃えて馬や眠りし靜なり　眉月
親しめば際限のない火桶かな　十歩老
夕暮や已れ炭割る影法師　青嵐
一瓢の輕き浮世や鉢たゝき　殘花
この暮も娶らで髯の伸びにけり　鼠骨
湯豆腐に五人男の胡座かな　酒竹
二君には仕へ申さぬ紙衣かな　鳴雪
鰒食ふていよゝ健なる親父かな　小波
似た顔の兵が出て來る除隊かな　望東
觀ずれば海鼠の如き天下かな　三子
念佛に凝りかたまりし海鼠かな　四明
一休の蛸さげてゆく師走哉　子規

ろくでなの年にてありし大晦日　夏風
又三百六十五度の夕日哉　子規
宮様の門靜かなり大三十日　同
行年や糟糠の妻子澤山　不句
行年の大河滔々と流れけり　子規
むつかしや何もなき家の煤拂　漱石
煤掃や庭に居並ぶ羅漢達　鳴雪
天井の天女の煤も拂ひけり　同
かりそめに白粉ぬるや年忘　青々
掛乞のそれと知られぬ咳拂ひ　望東
掛乞やおのれ二才と思へども　小波
猫の子を引張凧の炬燵かな　二星

瓜盗むことも忘れて涼みけり　子規
冷瓜浪の頭にぽかん〳〵　同
夕風の鷺吹飛ばす青田かな　同

雨雲の烏帽子に動く祭かな　子規
夏羽織我を離れて飛ばんとす　同
蚊をたゝく忙がはしさよ寫し物　同
蠅打つて暫く安し四疊半　同
絶えず人憩ふ夏野の石一つ　同
犬が來て水のむ音の夜寒かな　同
山門をぎいと鎖すや秋のくれ　同
四つに組んで最負の多き角力かな　同
幕吹いて伶人見ゆる紅葉かな　同
目鼻かく糸瓜の顏の長さかな　同
時雨るゝやいつまで赤き烏瓜　同
屋根の上に火事見る人や冬の月　同
口こはき馬に乘たるあられかな　同
一村は青菜つくりて冬籠　同
無爲にして海鼠一萬八千歳　同
藪入の薪を割りて歸りけり　鳴雪

昭和時代俳句抄

春の部

寒明の鳴りをしづめて日本海　羊多樓
春寒や淺間山上の一つ星　鬼城
春寒やことり〳〵と粥煮ゆる　空蟬
海鳴りのしきりに聞え春寒し　陽城
かゝはりも無きいさかひや春の宵　むみじ
春の日や心にそむく髪のくせ　閑子
春の日や鱶の顔出す海の上　破軍星
嶌の輪の二つかさなる春日かな　枯月
暖かや馬の背打てば立つ埃　苔石
うらゝかに水音通ふ芝生かな　雨城
のどかさに潮ふく沖の鯨かな　藤華
遲き日や泣かせて歩く子守婆　月二郎

永き日や鶏飼へる町の寺　苔水
鼻を振つて尾を振つて象や日の永き　春虎
行春や一輪挿の殘り水　豊舟
遊ぶ子の影あたゝかき春日かな　春州
春の月うかみ出でたる如くなり　虚子
寢にかへる外に用なし春の月　青柿
朧夜や乳の香甘き子を抱いて　青呂
春雷にとぼけ顔なる鸚鵡哉　芦陽
春風や猫にさからふ七面鳥　柚釜
大汐に張る纜や風光る　木公
風光る汐先走る小蟹かな　郷雲洞
光る風小松の芯の皆搖るゝ　雨讀
小波に追はるゝ蟹や風光る　呂水
戀塚に來て降りそめぬ春の雨　播水
國寶佛に畫の灯や春の雨　紫蘭
春雨や白粉臭き女風呂　さひ女

一木〳〵のかたち霞めり屋根の松　指月
あかときの霞にそゝぐ大河かな　薫風子
だしぬけに汽笛の鳴りし霞かな　梅夫
大寺や雪解雫の賑かに　的浦
川尻の霞みて廣し春の水　田水卿
あの汽車が行けば午なり畑打つ　孤鶴
校服のまゝ畑打つ一人かな　田吾作
凧一つ暮れ殘る雪の山河かな　藤邨
鶯や千人風呂に只一人　南喬
鶯の聲近うして靜かなり　苦瓢子
乙鳥や昔ながらの京紅屋　米太
燕や雨の中なる渡月橋　播堂
燕に軒の忙しき老舗哉　晃畔
轉りの中に斧打つ谺かな　半水
雲雀落ちて夕靄こむる廣野哉　肉齊子
飛行機と雲雀と空の碧さかな　峻石

聞法の人眠む氣なり遠蛙　渉川
うつる世を知らである樣や梅の村　句佛
椿落つや又一つ消す人名簿(悼)　白虹
土に坐して乞食三味ひく櫻かな　桃里
黄昏の月かゝりたる櫻かな　畔爐
鐘國寶にして餅あり櫻あり　春風子
垣根越し夕ばなしや花明り　友次郎
花人のどよめく中の巡査かな　泰堂
鯉浮いて池の落花を押し動く　端山
つながれて寢てゐる牛や花吹雪　まつ江
月さして落花の水の流れけり　春水子
雨の夜や蠟燭つけて花の茶屋　兼輔
寂として石に花散る木魚かな　正陣
托鉢僧下りし電車や花の雨　秋湖
藤の搖れ柱鏡にうつりけり　白水
山吹や卵を生みし鶏の聲　健歩

山吹や一時もたぬ空の色　句佛
遠足や校歌に晴るゝ花菜道　醉花
塗替へてポストの赤き春日かな　月象
うすれ行くうすれ行く人橋朧　雨竹
花曇議事堂白く聳えたり　青波
花曇花火の谺又谺　鴻
初虹の末はかすみになりにけり　肥水
春風やふはり〳〵と落下傘　松畔居
出帆のテープは切られ春の風　湖山
屋上に並ぶ生徒や春の風　丁木
廻廊や般若の面に春の風　金峽
春風の障子をあけて病みにけり　松青
水の面や一點の虫風光る　黄映
春雨や畫を灯すビルヂング　蛙月
アスファルト我影うつす春の雨　紫園女
春の雪降りしきる嵯峨の夕日哉　句佛

ほほけつくす一畝の葱や春の雪　李青核
貝吹いて濱市告ぐる霞かな　松邸
朝の山霞の上に出てゐたり　禾映
淀川の流れひと目にかすみたる　梨葉
杉箸を割れば春立つ匂ひかな　蹄花
野良人の厚着に殘る寒さ哉　明浦
春寒の改札口を出でにけり　喜美子
朽紅葉寛つまりも春淺き　句佛
西陣や春尙ほ淺き機の音　伯洲
近づけば春曙の牛乳車　太郎
春曉の一番列車來りけり　北隆
春宵や聲をひそめて文使　春甫
春の宵已が白粉の匂ひかな　花朝女
誰待つとなく炭をつぐ春夜かな　麻風
朧夜やこぼれ聞きする蓄音機　化斗
暖や障子離れぬ虻の聲　千舟

春晝や雛放ちて守りゐる　溪村
鶏は里の日永をうたひけり　唯秋
徂春や首盔まれし多門天　悠々子
野川より寺へ寺より春の水　句佛
春水にうつる藁屋の障子かな　柏子
春の水田毎に滿ちて國廣し　松濱
紀元節大雪の山河一白に　待月
中日や晝餉もとらず團子腹　一谷
出代や棚に忘れしひび藥　天浪
出代のやゝ垢ぬけて歸りけり　白菫
走らねば凧も上らぬ日和哉　泉々
家内中持て餘す子や入學す　煌星
摘草や母も來てゐる川向ふ　春路
妻も出て何かの種子を蒔きにけり　壽泉洞
鶯の鳴くや今出川御門内　紫影
人は都へ上りけり雲雀揚りけり　黄洋

夏の部

夏めくや京の女の洗髪　辰之丞
夏めくや水からくりの水の音　黄夕
眞つ晝の草の實はじく暑さかな　光星
ツルハシの揃つて光る暑さかな　沙丘
月涼し垣ごしに話しかけらるゝ　佛太
大甕に涼しき水を盈たしけり　紅二
短夜の泣く子に障子白みけり　まさ女
獅子舞の隣まで來り麥の秋　青嶺子
炎天に獅子の彫像うそぶけり　黄楓
薫風や疊替えせし大廣間　太坡
手づかみに魚賣る舟や夏の月　歩牛
鍋釜に夏の月さす厨かな　五沼

雷にみな集りし茶の間かな　もとゐ
かけ戻る犬や童や大夕立　善一郎
二竿にあまるむつきや梅雨の宿　さか子
五月雨の土間に入り來る蛙かな　山彦
五月雨や煤け天井に壓され住む　不虛
夏山に杣が時計の鳴りにけり　小櫻子
窟より暗き風吹く清水かな　汀波
野芝居の又かゝりたる祭かな　松濱
家並に格子を洗ふ祭かな　我觀棒
我描きし祭り行燈仰ぎけり　靜山人
ぶらんこにつぎ足してある幟かな　四二所
苗賣や雨に降られて呼びもせず　青谿樓
風鈴に夕立來るらし雲の色　梟子
風鈴や曉すでに窓にあり　北雲
風鈴や子等の笑のほがらかに　耕禾
風鈴に灯さずひそと居たりけり　龍膽女

かけられてほゝ笑み返す水鐵砲　美保女
裸子や鷄追ひ廻す水鐵砲　ゆかり
亂れたる團扇重ねて泊りけり　かな女
刈りたての頭に輕ろし夏帽子　呑子
夏帽子ぬいで釣橋わたりけり　晴峯
一家みな蚊帳吊りしまゝ出でにけり　せき女
夏帶に涼しき鮎の畫繪哉　繁女
單帶むすびあぐねし鏡かな　千々
がつしりと肩幅廣き浴衣かな　城北
夕月の江の島へ行く浴衣かな　白陵
胸高に帶結びたる浴衣かな　樂天
歸り帆や漁夫一家族みな裸　尺歩
玄關に畫寢の足の見ゆるかな　南風
畫寢兒や顏につきたる疊の目　可芳
もぐ〳〵と口より畫寢さめにけり　駿一路
夏痩の雲ばかり見て暮らしけり　雅之

夕涼み子を中にして歸りけり　繁子
涼み碁の助言してゐる巡査かな　青宇
納涼たりて一氣に門を戸ざしけり　雨州
涼み舟提灯燃えし騷ぎかな　仙者
一人居の淋しくなれば水を打つ　柊花
行水や泣く兒に家内總がゝり　伯洲
消え殘る虹の下なる田植かな　春里
笠雫しばし止むなき田植哉　八重女
下り來し山を仰ぎつ心太　春遥
老鶯や晝しづかなる山の坊　高夷子
徐ろに麩を押し廻る金魚かな　木花
町の灯の灯の町の灯の金魚かな　無外
みさゝぎの門しめてあり蟬時雨　雷浦
神泉にひゞきて晝の蟬時雨　天羊
聞きゐれば蟬涼しうになりにけり　一木
蚊を燒くや燭をさゝげて女あり　清風郎

藪蚊うてば縞あざやかに手に殘る　千重子
欄干に出でつかくれつ蟻の道　瓶耳呂
一ぴきの蟻さまよへるたゝみかな　通草
灯の中に光る夜店の螢かな　糸女
ベランダに螢籠ある館かな　あい子
大沼の月の出おそき螢かな　靜寂
日毎出ておなじところや蓼　十六浦
夕心ひとり見てゐる水すまし　地上
まひまひは浮葉はなれて又ゝひぬ　青澄
泡くれば泡を追ふなり水馬　功
花桐や大藁屋根の百姓寺　雨村
誰となく歌ひ出したり木下闇　花女
夕顏の花ゆれ初めつ月登る　一睡
夕顏の開くは開き靜かかな　泥中
夕顏に風のいたりてひらきけり　艸月
夕闇の迫る牡丹の白さかな　清崖

雨の夜の明けはなれゆく牡丹哉　香城
已が葉をかむりて風の牡丹哉　盧子
牡丹搖るゝ奥に舞樂の響哉　松宇
夕雲は動けど牡丹靜かなり　斗南
月見草咲くや石炭殼の山　尺予
萍や人渡りゆく太皷橋　一聲
池に映る廻廊高しかきつばた　春洋
空うつるところ〴〵や花菖蒲　青龍
蓮浮葉しづかに晝の雨が降る　灯舟
鈴蘭や紗のカーテンに夜の風　白菫
鈴蘭や借間して住む女教員　菱舟
夏草やくづれしまゝの假舞臺　茶村
瓜の馬耳も尻尾も無かりけり　花朋
口上を面白く賣る西瓜かな　春鶯
一つ〳〵叩かれて西瓜買はれけり　鶴山
麥干すや臨時休暇の校庭に　桐圃

林檎二つ頬ずるやうに持つ兒哉　文方
筍の皮おもしろくむきにけり　きせ如
親ひとり子ひとり住むや今年竹　くじやく
若竹や尼寺とのみ名を知らず　柳涯
月涼し曳き出したる裸馬　蚊又
夕立雲大白蓮のゆれて來し　雨月
訪ふ人も無き尼寺や五月雨　一釣
大空や風に延びたる吹き流し　柾美
メーデーの長陣雨にぬれつくす　妙女
メーデーの列の尻尾に大雨かな　十六浦
にこやかに日傘たゝんで近よりぬ　やす子
船頭の應と答へぬ蚊帳の中　丈甫
衣更へて駈け出す吾子を見送りぬ　六本杉
恙なく暮れて水打つ浴衣かな　夏汀
門涼み隣のラヂオ聽くとなく　大羽
看經の寺廣ろ〳〵と牡丹かな　春嶺

秋の部

秋立ちて水底石の見えにけり　回哉
汐鳴りの音澄む朝や秋の立つ　偲堂
ぢり〴〵と蟻の餌を引く殘暑哉　竿月
新涼の家廣々と座りけり　十牛
新涼や海へ落ち込む流れ星　北江
新涼の髮結ひ上げし女かな　草子
新涼やわれ一人行く街の朝　一緒
朝寒の流し場のぞく野犬かな　夕咲子
朝寒のかほのそろひて勤めけり　曉水
粥たきて客をもてなす夜寒かな　逕井
本堂の廣さ身にしむ寒さかな　馬塘
古妻は客にいも燒く夜長かな　月浪

長き夜の乳足らぬ子も眠りけり　いはほ
だしぬけに隣笑ひし夜長かな　芳影
誰か戸を叩いて居りぬ夜長宿　石木
晩秋の巷に湯氣や芋ふかす　青陽
行く秋を雜誌まとめて賣惜む　かの子
山の灯の近く見ゆるや天の川　柳外
海鳴りの夜毎に冴えて天の川　陽村
門送りして歩を返す天の川　登女子
水な上の瀨の高鳴りや天の川　凛女
大比叡黑々として星月夜　杜外
森を出て花嫁來るよ月の道　茅舍
夕月に馬の背なでゝ別れけり　さわ女
海士の子の裸で走る良夜哉　湖月
一人去り二人去りたる月見かな　ながし
戸もさゝで宵寢の顏や稻妻す　松宇
唐黍に稻妻はしる野風呂かな　白蒐

秋雨や虹の中なる寺の屋根　比露志
秋雨や町一杯に在所馬　霜容
川霧や竹割る音の向ふ川岸　四丁
朝霧や松がくれ行く登校兒　吾丈
すがゞし耳の穴吹く秋の風　三巴女
うち連れて野馬渉るや秋の水　より江
鳴子遠く響く空氣の乾き哉　無黄
門鳴子學童引いて去りにけり　慧月
夜學子のひそかに長き欠伸哉　かつみ
支那人に孔孟を說く夜學哉　破葉子
子に呉れて捨つるが儘の扇哉　南汀
音頭取變りて踊はづみけり　雲峰
踊り足らぬ淋しさ雨に戻るなり　蛙月
人さがす仔犬もありぬ盆踊　禮子
凭りなれし緣の柱や渡り鳥　紫明
拱ぬきて艦長立つや渡り鳥　連山

山雀や遠く晴れたる斧の音　吐句志
蟲籠を吊つて月夜の長屋哉　濱風
風鈴の耳のいとまを鳴くちゝろ　杏雨
こほろぎや訪へば寢て居る月の家　不老庵
鉦叩通り過ぐれば叩きけり　叢笛
校庭の寂として蜻蛉飛ぶ夕べ　春溪
蜩や一灣の舟みなともす　溪聲
蜩に松深く閉づ城の門　映霞
遠山へ日の移りゆく紅葉かな　憲郎
家鴨百羽川からあがる柳散る　凡水
旅人に入日はながき芒かな　田字草
あかつきの霧の消へゆく芒哉　清子
朝顏の垣越し買へる豆腐かな　玉振子
朝顏や夏痩の子を抱いて立つ　花女
菊を以て自らなる籬とす　挿雲
窓高く萩に屆かぬ手の白し　行人

萩喰ふて牛叱られてゐたりけり　迷水
萩巡り又會ふ瞳笑ひけり　一竹
里の子は寺の名知らず破芭蕉　柳生
コスモスやこの家長らく人住まず　日蔭
コスモスや倒れぬはなき花盛り　たかし
鬼灯に千代紙着せて人形かな　樂人
鬼灯に着物着せたり女の子　松宇
柿ほめる林檎の國の兵士かな　佳山
唇に殘りし柿の澁味かな　京外
先生の貧乏久し靴韋　小提灯
大糸瓜馬の面出す窓の先　水哉
月の人しばらくにして笛吹きぬ　鈴蘭女
肉身に侮られけり秋の風　車春
新涼の大桶に澄む豆腐かな　雨稻
馬のものぽつ〳〵煮ゆる夜長かな　湖雲
星涼しどこやらで花火上げてゐる　皆川

冬の部

里の馬皆鈴もてる小春かな　沸茶
寒むそうに人がうしろを見せてゐる　風馬牛
空を刺す一本杉の寒さかな　几蔦
水藥の腹にこたえる寒さ哉　逃雀
節分や心にひそむ鬼もなし　句佛
鰤の頭一つ買ひけり大晦日　祥石
門さして大つもごりの心かな　青衣
牛の聲山河にふかし冬の月　煙雨樓
寒月に鐵の大扉を閉すかな　智石
大雪の村に往診車哉　潭水
降る雪の吹き込む谷の大溫泉槽　芙蓉峰
大吹雪押送巡査通りけり　良水

蘭の葉に添ふて霰のこぼるゝよ　律子
山門に遊ぶ子ありて時雨けり　犀月
時雨るゝや今はあとなき鯢川　麥人
一ト時雨しぐれしあとの月夜哉　鳴魚
月さすやお百度石の霜白く　黄子
大霜の一番電車通りけり　竹鳳
自轉車に乘りて僧來る枯野哉　貞子
夷講の一座笑ふてゐたりけり　松風
寒念佛雪にしみこむ鉦の音　句佛
鬼は外にかくれて見えぬ月夜哉　芳風
榾焚いて見て見ぬ様に女房居る　大羽
窓越しに冬山見ゆる媛爐かな　砂々
髪結うてつゝましう寄る火鉢哉　凡雪
火鉢抱いて岡惚の眼を閉ぢにけり　層雲
食ひ足りて眠氣催す火鉢かな　詩有朗
偽りと知らで待ちゐし火鉢哉　瓢石

黑き手のよく集りし火鉢かな　羊角
書淫の眼暮るゝを知らず桐火鉢　朴堂
一人行けば針子皆ゆく火鉢かな　哲堂
末席に所感を述ぶる火桶かな　規十
祝事にかり集めたる火鉢かな　九萬子
炬燵より猫ついて出る午餉哉　六朗子
歌舞伎座の土產擴げし炬燵哉　赤山
炭つぎに來りし湯女の長話　岫石
炭一俵まづ届きたる新居かな　守拙
肩掛やそれそれ似合ふ女づれ　骨山
手袋に錢もどかしくつまみけり　水花
綿入や漸く父に似て老ゆる　雲丹洞
人妻のおしろいつけて冬籠　侍巾
冬籠障子眞白き一間かな　彭鱗
冬籠山籟聞いて起きしぶる　蝶衣
法悅にしたりて冬を籠りけり　渉川

抱き古りて光る火鉢や冬籠　粥味
冬籠吊古ぼけし世界地圖　雁山
一日をまことしやかに冬籠　吼而
ふたゝびの女形にかへる除隊哉　黑潮
捨惜しむがらくた多し煤拂　とう子
煤掃や人形抱えて古女房　一餘子
背の子をおろして日向ぼつこ哉　金鼓女
青天の鳶を見てゐる日向ぼこ　青甫
日向ぼこ餘生の顏を並べけり　喜路
黑髪をもてあましゐる風邪哉　草人星
ひとり居の門とざしたる風邪哉　京女
筆おいてつぎの嘘をつゞけけり　柳風
掛乞の言葉凜たる娘かな　洞閑居
眠らぬ子二人抱きけり火事の夜半　かな女
京極も寢てしまふたる夜番哉　宵火
皺の手にのばしゐる眞綿かな　笋莊

顏見世や大成駒の淀の君　美津子
先生に竹馬の子の皆下りぬ　海人
竹馬の一節低き弟かな　南泉
竹馬や下駄持ち行くは女の子　竹四
竹馬のもつれあひ出る御門哉　たもつ
竹馬の影ながゝと來りけり　みのる
竹馬の影つゞきゆく障子かな　紫雲
寒紅や笑めば茄子齒愛くるし　房女
乾鮭の熨斗を咬へてかゝりたる　春甕
餅搗や皆起きて來し子供達　白洋
この村も餅搗く家のつゞきけり　文鳳
大農の餅搗く二日一夜かな　水花
千鳥啼く富士あり〳〵と月夜哉　紫良
嫁入の荷が橋を過ぐ千鳥かな　浩水
牡蠣舟に座りて川の廣さかな　圭草
古塚に詣人なき落葉かな　雨月

看病のひまを掃きゐる落葉哉　一燈
鐘樓にかきためてある落葉哉　志保女
無花果の今一葉にて落ち盡す　百川
再びの銃音きこゆ冬木立　花城史
枯草のすいと高きがほろ寒く　二昧
川底をまろび流るゝ蕪かな　木冠人
凩に女ばかりの早寢かな　うめ女
朝霜に一番汽車の汽笛かな　巴江
追分で一人となりし枯野かな　松宇
向ふから來るも一人か枯野原　紫翠女
呼べは既に寢てゐる兒等や置炬燵　似古
妻とゐて笑ふことなく冬籠　風頼
寒聲や月のしみ入る喉佛　冬葉
寒稽古雪投げ合ふて戻りけり　藪柑子
竹馬子やへう〳〵として風に乘る　露鳴
一端を洩らす不平や年忘れ　鶏雲

新年の部

元日や皆揃ひたるみなの顔　麥人
門前の松にのぼりし初日かな　晩秋
手にさげし大せんべいや初詣　耕郎
一心に見るて取られしかるた哉　半莊
美しき手のすさまじきかるた哉　房女
暮るゝ町猿曳猿と語り行く　六山人
猿曳や猿と並んで日向ぼこ　敗荷
獅子頭ぬげば卑しき男かな　百合子
初市や雪にころがす大鮪　圭州
ひそやかにかるたの聲や婢部屋　靜子
頬冠とれば女の猿廻し　圭草
初髪や銀の元結はねあげて　千秋

昭和九年五月二十四日　印刷
昭和九年五月二十七日　發行

【定價金貳圓】

著作兼發行者　若月保治
東京市小石川區駕籠町一一五
發行所　新月社
東京市小石川區丸山町一一
印刷者　有澤宅次
同　所
印刷所　新星社印刷所

5,23

終